

伊 豆 大 島

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・情報センター

地下深部へのマグマ注入によると考えられる長期的な島全体の膨張傾向が継続しています。
今後の火山活動に注意する必要がありますが、現在は静穏な状況で、三原山山頂火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は見られません。

平成 19 年 12 月 1 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図 1、図 4－②）

大島北西外輪に設置してある遠望カメラでは、剣ガ峰付近のごく弱い噴気が時々観測されたほか、三原山山頂火口の噴気も時々観測されました。

21 日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺の所々で、これまでと同様にごく弱い噴気が引き続き確認されました。

・ 火口内の状況（図 2、図 3、図 4－③、図 5－①）

21 日に実施した現地調査¹⁾では、三原山山頂火口内にある中央火孔の最高温度は約 43℃で、1999 年以降ほぼ同じレベルで推移しています。また、中央火孔内の地表面温度分布は、前回（2007 年 11 月 26 日）の観測と比べて特段の変化は認められませんでした。その他、三原山山頂周辺の噴気温度にも大きな変化は見られませんでした。

- 1) 最高温度は赤外放射温度計、地表面温度分布は赤外熱映像装置をそれぞれ用いて観測を行っています。いずれの装置も、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

・ 地震や微動の発生状況（図 4－④、図 5－②、図 6）

火山性地震の発生回数は少なく、地震活動は静穏に経過しました。震源は、ほとんどが三原山周辺の浅い所と西方海域に分布しており、これまでと比べて特に変化はありませんでした。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図 4－⑤、図 5－③④⑤⑥⑦）

GPS、光波距離計²⁾及び体積歪計³⁾による連続観測では、2007 年 3 月頃から深部へのマグマ注入によると考えられる島全体の膨張が見られています。

- 2) 光波距離計を用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定し、山体の膨張や収縮による距離の変化を観測しています。
- 3) センサーで周囲の岩盤から受ける力による体積の変化をとらえ、岩石の伸びや縮みを観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等で変化が観測されることがあります。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 20 年 1 月分）は平成 20 年 2 月 7 日に公表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、東京大学及び独立行政法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『数値地図 50m メッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 17 総使、第 503 号）。



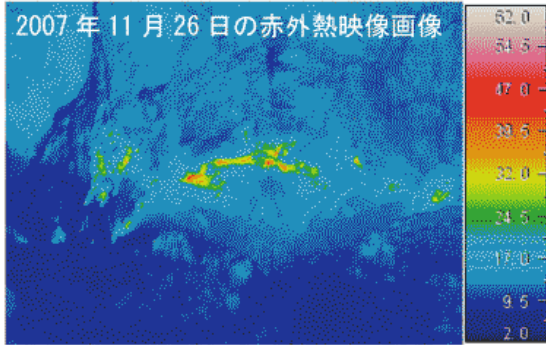
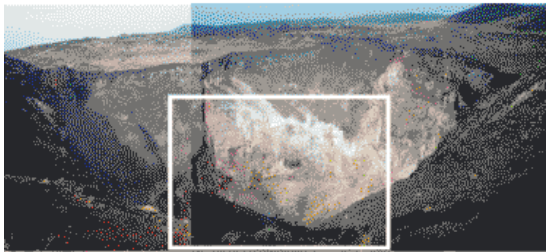
剣ガ峰付近 (12 月 21 日、北西方向から撮影)



山頂部 (12 月 11 日、北西外輪遠望カメラによる)

図 1 伊豆大島 三原山山頂火口内及び山頂部の状況

2007 年 11 月 26 日の火口内壁の画像



2007 年 12 月 21 日の火口内壁の画像

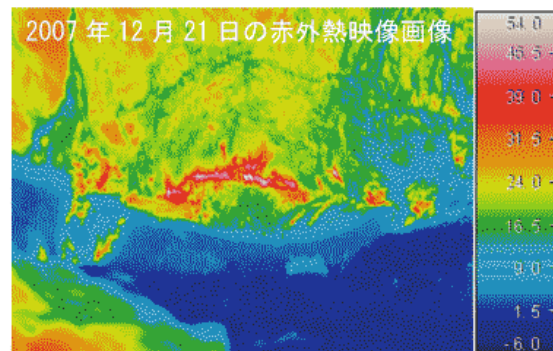
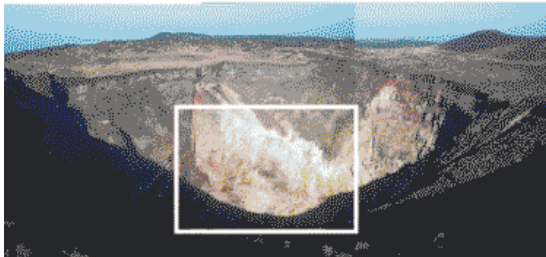


図 2 伊豆大島 中央火口北側内壁の状況（左）と地表面温度分布¹⁾（右）
（左の写真の白枠部分が右の赤外熱映像撮影部分）

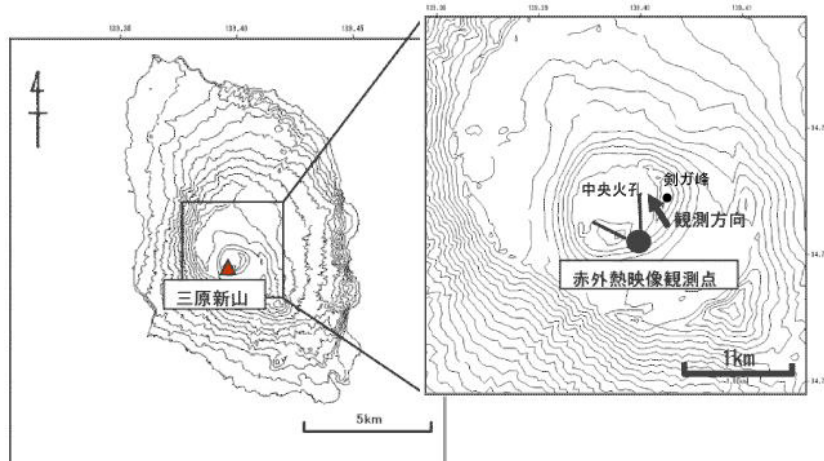


図 3 伊豆大島 中央火口内の地表面温度分布¹⁾ を測定した位置

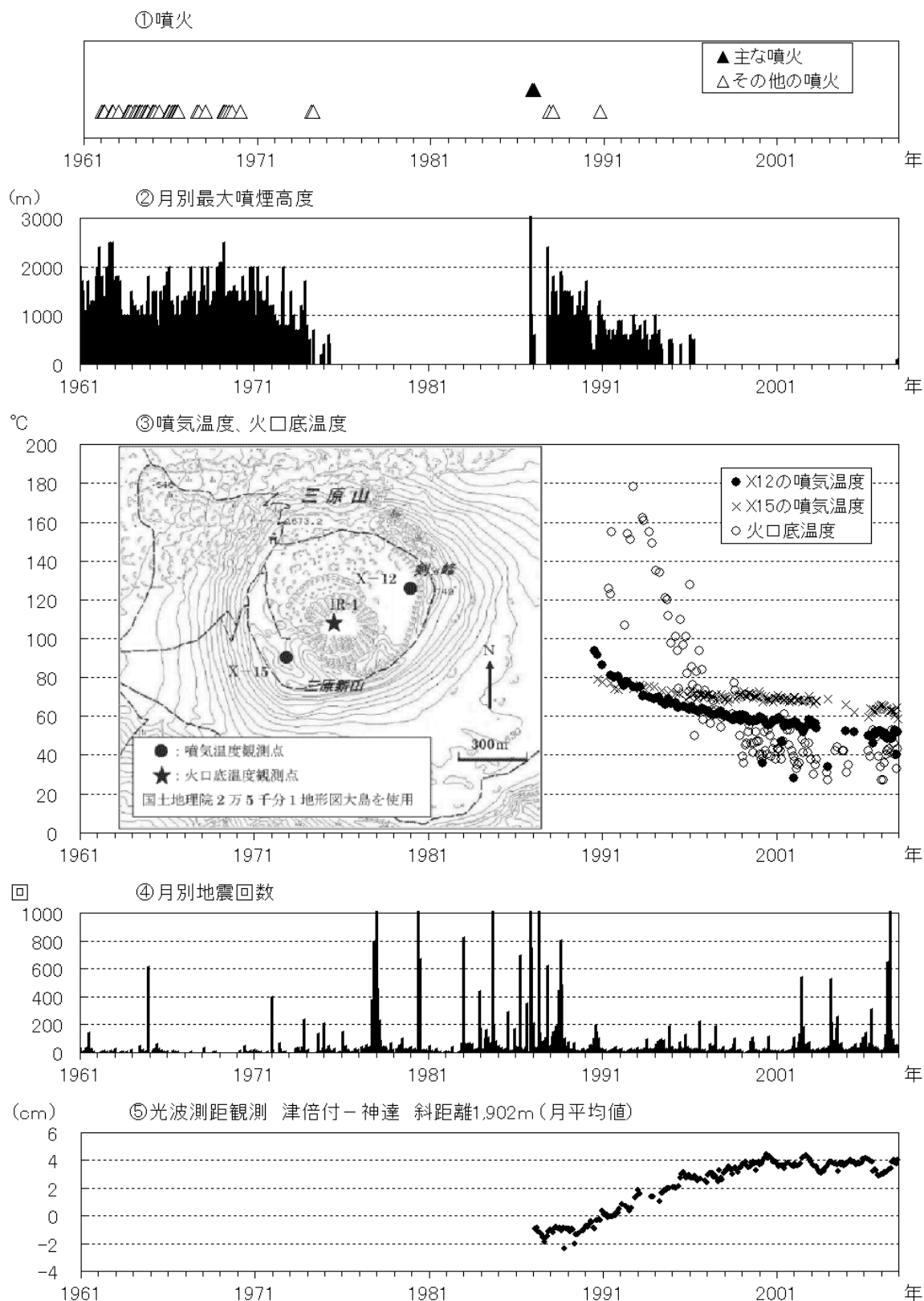


図4 伊豆大島 長期間の火山活動経過図（1961年1月～2007年12月）

- ②大島測候所から観測を行っていた時期には外輪山の陰になる影響で観測できる噴煙高度が異なり、1991年12月18日までは火口縁上130m以上、2002年2月28日までは火口縁上300m以上でした。
- ③火口底温度（IR-1）は赤外放射温度計¹⁾を用いて離れた場所（図3赤外熱映像観測点と同じ）から測定した値。噴気温度（X-12、X-15）はサーミスタ温度計⁴⁾を用いて直接測定した値。
- ④地震回数には伊豆大島周辺に発生した地震も含まれています。
- ⑤光波距離計²⁾による月平均値（観測開始は1987年1月）。

4) 半導体の電気抵抗が温度変化する性質を利用して温度を測定する測器。

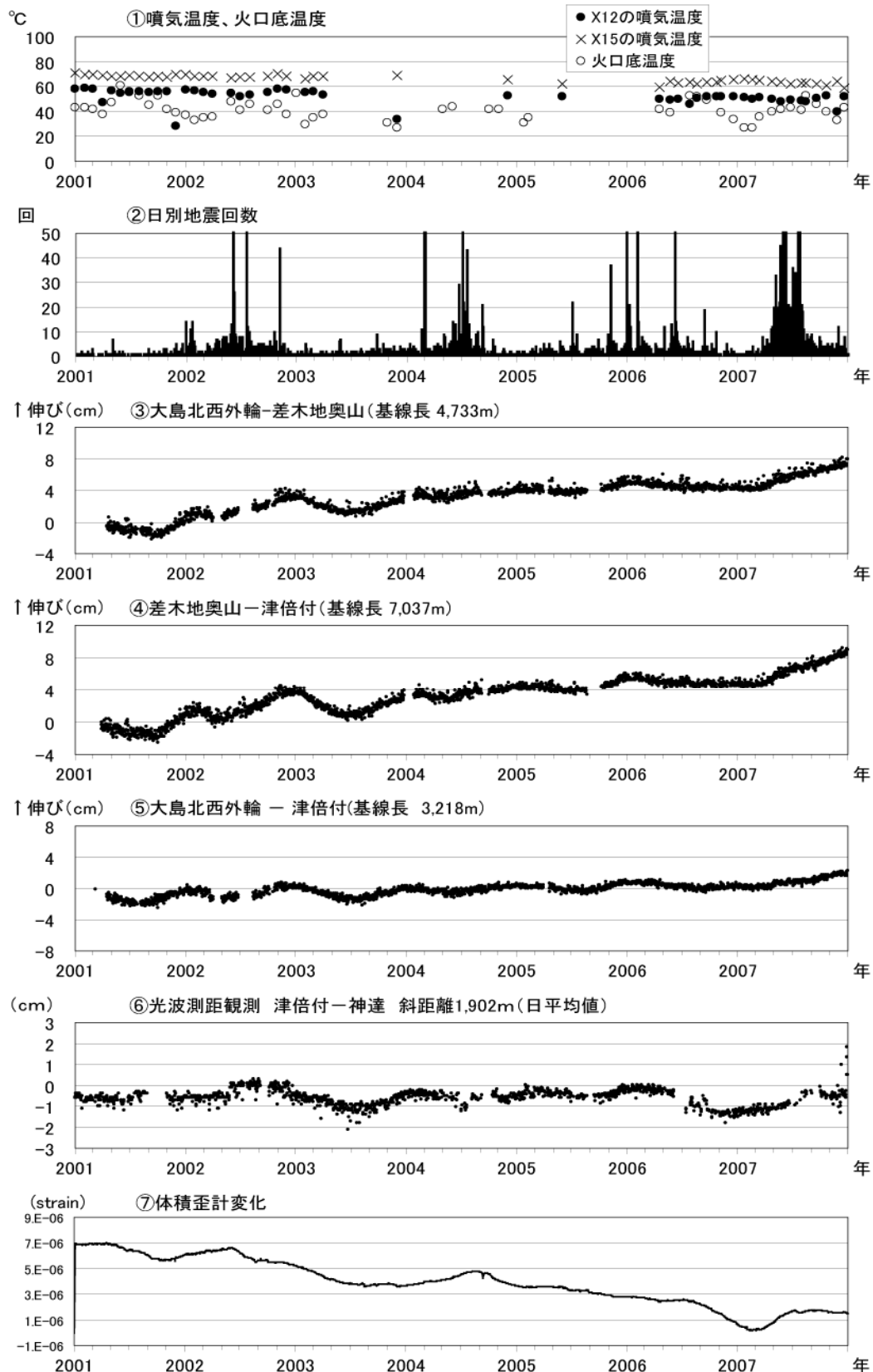


図5 伊豆大島 最近の火山活動経過図（2001年1月～2007年12月）

①火口底温度（IR-1）は赤外放射温度計¹⁾を用いて離れた場所（図3赤外熱映像観測点と同じ）から測定した値。噴気温度（X-12、X-15）はサーミスタ温度計⁴⁾を用いて直接測定した値。

③④⑤GPS連続観測による日平均値（観測開始は2001年3月7日）。③～⑤は図7のGPS基線③～⑤に対応。

⑥光波距離計²⁾による日平均値。 ⑦体積歪計³⁾による日平均値。

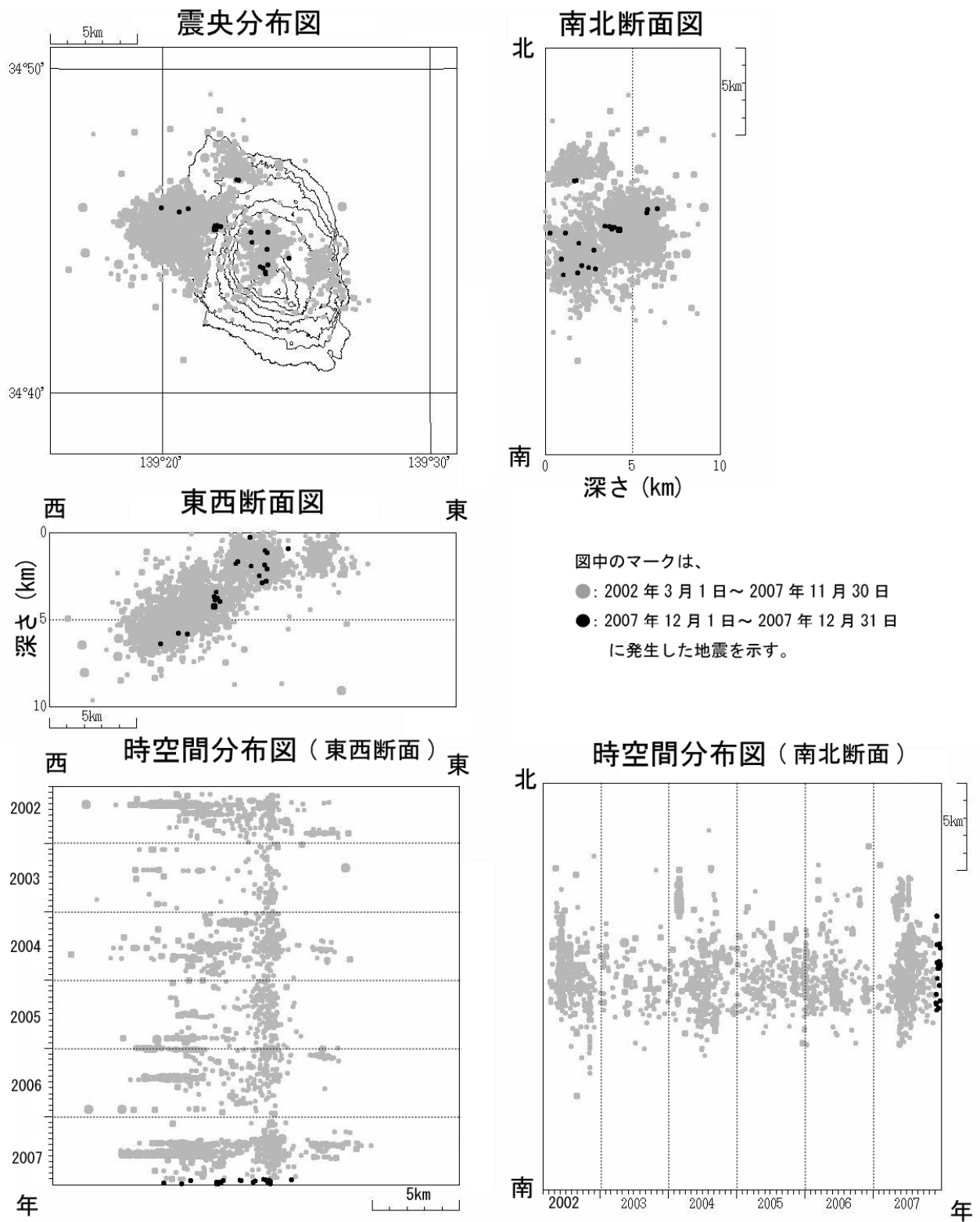


図 6※ 伊豆大島 震源分布図（2002 年 3 月 1 日～2007 年 12 月 31 日）

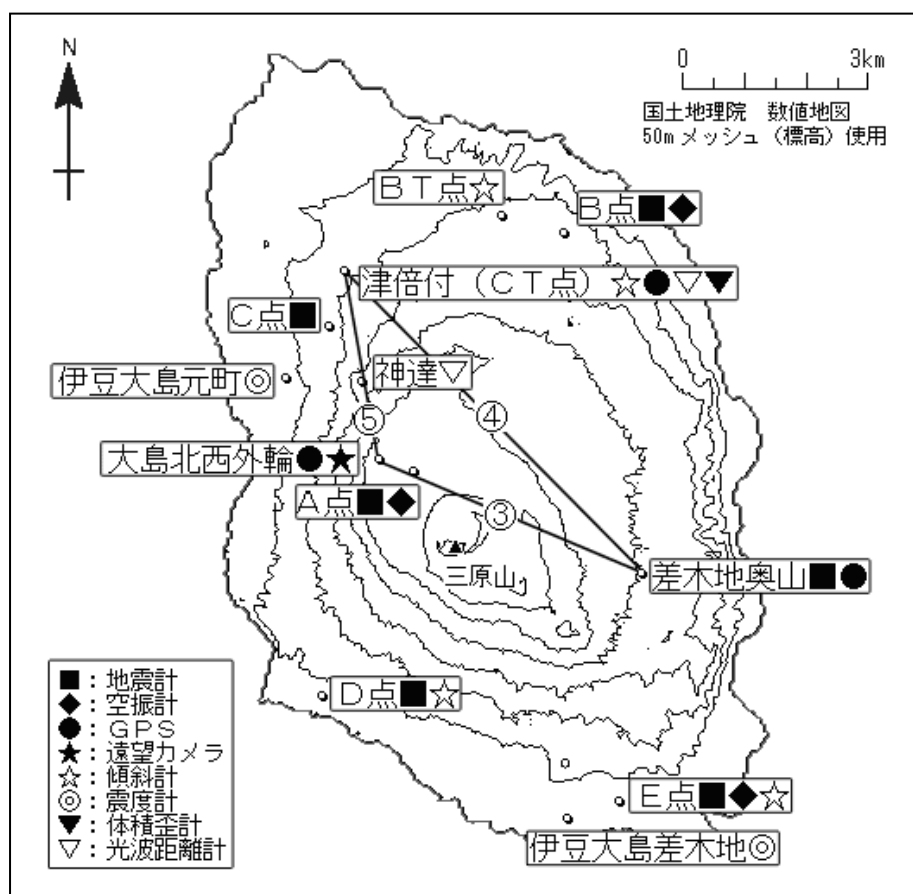


図 7 伊豆大島 気象庁の観測点配置図（小さな白丸は観測点位置を示しています）
図中の③～⑤は図 5 の GPS 基線③～⑤に対応しています。